

「なぜ何もないのではなく何かがあるのか」の解釈問題

小川 文紀 (Fuminori Ogawa)
大阪大学大学院人間科学研究科

本発表の目的は、存在の神秘 (mystery of existence) とも称される「なぜ何もないのではなく何かがあるのか (why is there something rather than nothing) ?」という問いの分析形而上学における解釈が、分析形而上学登場以前の解釈とは異なっていると主張することである。すなわち、現在の分析形而上学者たちが存在の神秘と見なして考察している問いは、それ以前に存在の神秘と見なされていた問いとは別種の問いであると主張する。

現在の分析形而上学において、存在の神秘の解釈は一般的に「なぜ具体的存在者がいないのではなく具体的存在者があるのか？」と解釈されている (van Inwagen 1996)。この解釈は多くの人々に受け入れられてきたが、近年になってその解釈に懐疑的な見方をする者が現れ、様々な解釈の代案が示されるようになった (Goldschmidt 2013, Brenner 2016)。しかし、それらの解釈はどれも、基本的に存在の神秘は「なぜ何もない世界ではなく何かがある世界なのか？」ということの意味する問いであると考えているように思われる。

一方で、分析形而上学が登場する以前に、Wittgensteinは「世界がどのようにあるかではなく、それがあということが神秘的なのである」 (Wittgenstein 1961) と述べているように、存在の神秘を「なぜ世界がないのではなく世界があるのか？」と解釈しているように思われる。本発表では、双方の解釈の違いを可能世界の観点からより詳しく見ることで、それらが全く異なる問いであることを確認したい。

参考文献

- Brenner, A. (2016). "What Do We Mean When We Ask "Why is There Something Rather Than Nothing?". *Erkenntnis*, 81 (6), 1305-1322.
- Goldschmidt, T. (2013). "Introduction: Understanding the Question", In T. Goldschmidt, (ed), *The Puzzle of Existence: Why Is There Something Rather Than Nothing?* Routledge, 1-21.
- van Inwagen, P. (1996). "Why Is There Anything At All?", *Aristotelian Society Supplementary*, 70 (1), 95-110.
- Wittgenstein, L. (1961). *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge, (D. F. Pears and B. F. McGuinness, Trans.); first published in 1921.
- Wittgenstein, L. (1965). I: A lecture on ethics. *Philosophical Review*, 74 (1), 3-12.